異本十六夜日記

特別
へ10
7375

十六夜日記吳本

八10
17375

<2019-66>

三柚書屋
成島文庫

羽卒林麓美取書

陸国文庫石忍文庫旧蔵吾妻下り一冊大島氏青谿書屋所蔵本写
の写本なり比較するに真字仮名差右者一致に帰するが如し乃ち別に
新鈔本なり
昭和八年七月二日　川崎一馬

（江戸中期以後の写）

昭和甲子秋久しく本書を所有せしに、若り日筆の跡ありとて拙く恥かしき姿なれども、旧き擬ふ情一のちり。昭和八年九月、書法字一五に論文を公表す。好き筆はその点六のまちなり。

一馬識

三柚書屋
成島文庫

源氏物語人間世界の人間世界の塵の中に求め出でる
人間文化の代を治める民と成る
治める者の心の賢王の代のあるを
知らざる者の心の賢王の代のあるを
知らざる者の心の賢王の代のあるを
末の代の心の形の生を水上清しと心を泥砂
生を含む形の生を成る者の生を利する
生を含む形の生を成る者の生を利する
よ深く底の深く浅き骨肉の中形も生を世の生を
りもかへりて天子の徒のあるまて上海の人民
乃ち乃ち流生の久しき細川の底の心海の所

ゝ妙しみとも養ひ立らく十五才に成しハ父か跡を継を
立て　能よ流らう海つゝせきやうくまゝく整り乱
て弟海かり絡ひし折らうと今成やうに是をもまて
蹴さ乱うも畢竟を逆へく整りし年月もお
己傷り當今も卑文祖より傳へしせうこんかさ
して総てし家を統してんと此度何やう乱く押領し
父の形見に残まつる足きりるとを乱ひりしるに成就く
ら人足萬民に世を志すらの口惜さらかくて家の
此時に総乱んるとを出しゐて　君に奏すまて摂政

摂政ハ聞しも乱く心ひ給ひて言の葉とも成何事す
さま〻にやうらち捨て押領ありまゐて哀しくやうらに
古海よし逆えんるとも口惜かり給んハよハ東の境に越て
足形を分過んかいかにやう思ひ立ちよう〻さまてま
拾らり成人くる〻給を思ひ〻東の遥くも東乃
旅に免くり逆ハんるまさり逆ハ義よこ経し川置年
よとしるまて度ハ御むへき給もいかし給ハ再くあとを
秘まう風にの遂ふ物のこ経世中に家をとうらハ
都にあらく心付しかるにかりしとこゝろえて胸やくらうし

[illegible]

三月の立初めの名殘を惜みつゝ名ゝ
すべき九月も暮て和出ぬひの事なる事極家のあるじ紀人の
方よりかゝる人數日にすてとく帰りの事も
すゝ廻る歳十六夜月と備ふるよりの道たるこゝ物さし
[illegible]の形ん[illegible]かゝ[illegible]い逢坂の川を渡れ
[illegible]の形[illegible]今日[illegible]
[illegible]関の岩[illegible]又逢坂[illegible]
[illegible]の風[illegible]

[illegible]

[illegible]の関は名殘を[illegible]
[illegible]の前の世界[illegible]憂世の見形[illegible]
[illegible]の松風[illegible]も[illegible]
かゝ[illegible]関の清水[illegible]
形[illegible]
湖[illegible]
も一川の[illegible]沖吹風[illegible]
[illegible]

白波とふひともこゝにたちよりぬとて一松亭
間漁舟は海のうへにて家形うつり勢国の山橋たとりく
しくもおぼゆるに拙作の句歌すゝ出し篠原つゝ
るくとおこなひて拙家よりは武の畑北窓より
おぼえて書家にうつりさひるさ形きたるよそ
旅の空にあらぬ紀伊津に物うすゝ空形きに時雨ふ
神に詣する形く波のうへにおりたひて吟形森
とふふ不ふ岩〳〵なるよ岩の本粘たりく出らして
拙句たゝなりかりなきいらく

月をく海こゝ所なの月をく形時雨のり月を
して麻〳〵は岩海に古代の白形もすゝ馬ひ
海にて心ゝをゝ紀州の空を海絶ゝ新雨ゝ紀
紀出てひよ岩立の月りて鏡山定ゝ見ます面
白ゝ姿よ形んゝ海にて

立春の岩よ波のうちゝひて日ゝ見ゝて見ゝ鏡山
遠近の松容ゝ形ゝこ形ゝもひちひ形ゝ形
ひそ時雨いゝ山晴ていちゝ山形ゝ空ゝ出
ひちゝゝとゝて力ゝゝよ立春ふもゝ苦〳〵一通り

一氏下の句流布其夜月紀月

五月八日又晴天さむく
東西へ行くかるの折ふしよ
國もり宮り行りたる家にて憂樣の事掛ふ
合て有りしくはと祈りたる事共出て後り
ともやとあり迷かく後ていのそりたる
り樣の一切の事の痛えも思方出所故人の事
かくして不破の関よりもり行て是につもり風もた
行りたる所あり物をとく折ふしたる出て
四月九日不破の関屋の板ひさしに降りよりる月の

彩雲有りたる後に雨も降りすかり
古代の事のみ思ひ出て涙の袖よりさきくく
ゆく方なき山中とそるくひよ雲心のうつもりさ
思りて有り果て小鳥の啼も移形く涙の手さ法
したり初て家の降果を行後て思出る事掛を
見りて籠り雨面出る雲掛ゆ出て板形よ
ちらよりそそちたると詩よすんく詞の後て事の面
かるる旅遠て見るの所面細く形成る
涙雲とそるる者ても思ひ出て家古代の新のあんうき

行[是]角のうしろひえ塚より[illegible]日ゐる[illegible]を通り出
[illegible]の河[illegible]塚迄川[illegible]行[illegible]て[illegible]形さ初行塚て
[illegible]ちゆきうの明[illegible]を[illegible]八幡宮の宮[illegible]出八幡宮
神と仏[illegible]て[illegible]やうの形とうて[illegible]ん出て今
大明神と[illegible]せあひして松光やうちんかうちえん
滅よみ新[illegible]拝形行やう通り[illegible]我国ねとたし
[illegible]て

千早振神[illegible]と形[illegible]ち心の内い涼かり
[illegible]も時[illegible]の行も出[illegible]さ[illegible]苦[illegible]通す心静か

行[illegible]ちうして[illegible]河の[illegible]ちう名[illegible]
八橋と[illegible]る在五中将[illegible]
[illegible]島[illegible]る[illegible]
法迄と[illegible]杜若の形[illegible]形[illegible]
流[illegible]行[illegible]も又八川[illegible]
[illegible]や西の山[illegible]

流布十六歌日既[illegible]初句さくか[illegible]
[illegible]

[illegible]ちて[illegible]
[illegible]

若き心静にあそひ給ふ程に宇津の山近くし給ふ習見あく 五日之

まては蔦楓も紅葉して行衆所々に残れり坂はいとけはしく

しく旅人安く越ゆるも荒くうるは時雨る程なりしは

吟く思ひてわけ入る道なるもちらちら人と力として

登り給ふ程に紅葉あの梢に残れるを吟ける山峯は

苦しく情けなく[illegible]

紅葉のいと[illegible]山を出ては帰るにも[illegible]川の山路

行つかれしは初ものゝ[illegible]にて残れる[illegible]

行程にやうやう[illegible]宇津の山[illegible]

くて[illegible]国部[illegible]若くして侍りけるま

宗より人にて役り侍り文字[illegible]折りくは

国語く旅せる人宮家から[illegible]

東の方にまかりさまかり侍り[illegible]思ひ[illegible]

旅の[illegible]心[illegible]

川[illegible]思ふ[illegible]心[illegible]

猶さ[illegible]

都[illegible]真[illegible]君の[illegible]

行くは旅[illegible]東[illegible]

都にては旅立つ事を思ひ立ちし古人の旅しけれん
様々に義にもかへて遥かなる都もすかなる東の空し
立ちかへりけり

夜半の月をながめし東海の夜の津にふけて寝られず
夢にのみ旅をせし昔は思ひ出さ残る面影偲ばるる
名にし負ふ甚だ物語をみてし苦しむを慰むる旅
かくすさまじき伏見の海に待ちもちて心静かなる折から
手なれし夜は新しくすていて心をとめぬ筆の心して
此川を定めし旅の空に臨むは只心に任せて此程は大井川

冨士川堀りありては川の水でもすさまじく水の
流るるにて舟掘もし心まかせて渡りこそと見え掘りて
旅立つ人が渡りまつりてもこちら様々に
清見が関より見渡す沖を遠くより見る波を破る波の巌に
かかる事も面白く見ゆる程に様々なる
心も風も面白く見ゆる所は

此家流布十六秋日記ニ出たり

清見かた年ある岩よりも波の濡るるを好みて
流布十六夜日記ニ波の上をいとふ事ありて古き能冨士川と渡り田子の浦ニ打出て
田子の浦波むなしく見ゆる沖の小舟
小舟に紀連なりしかかる時物の音

流布日蓮上人富士川因み開と号して住吉三宮明神と詣でいのこうと云所はと問ひとなりて
此八日立出て箱根山よりかくるやうに元和元年に別りの遠しと古者陳舎は苦路ふ敷よりの
名所図会も載せ何り

富士の高根を見わたす山の裾にて
雪まろ見る 富士の雪も澤川の
わすれ草 田子の浦波 富士の
名所を語れる事共多のもよう
見うる風の心もとまて此さもうる
名所を求めては是を尋ねる
人の袖

こゝの中をよるくの山家
あり一面すゝ見せ十日斗此
編舎へ八川ゝ高さ一丈
程よこゝを形く 特にて
人の何り金八所別へとりて
用意して好せ有り 何る
云所より 形ゆりの人形
より 形へ高さ
面ゝを 形

毛ち文殊かとう自死れうす

なり。和家より　ちかうくわんして　鎌倉の公事とも
学ばかり　職よ代の改るの間さとり　弥ふとて　天の下
人こころも後　さも　集りて　権門の世よ市と形
家よ　京門　世の　ほろうよ　門さて　ほろび　後りの　ほろ
ひるかりの　のやうと　ふ　ほろ　世よ　衰り　世ふ
ひ年　色と　侵して　法法よ　門りの　あて　心ふも　形り
して　力　ほきて　ほろ　ふ　ほ　ひよ　ほろ　心　ほろて　光
法　ほろ　ほろる　ほよ　甚　年　も　ふ　ほ　ふも　衰て　朝　世　門　衰
ま　滅り　いこも　学風も　風　ほろ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　衰

文治元年改元弘安

ほろ若さえん　ほ　園　ほ　弾の　梅よ　ふ　信て　侵す
名と　侵ふも　ほ　ほ　ほ　撫　樋の　ほら　解　世　ほ　ほ　ほ　ほ
衰も　ほ　常々　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ

人心かなしのあるまほ　ほ　ほ　世　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ
かる　ほ　ほよ　若の　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ
風　ほ　風　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ
ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ
ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ

為関白

為家卿

ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ
ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ

とく思ひすれば、さきの人々は是うとく成り、
東の旅よりおもむき記侍らるゝこと、
殊に〳〵の物がたりとうけたまはりて、
感をなる時、侍従の局と成り、
あとと思ふ方よりも遠ふ新の男たちこそ、
誠よりあるまじきふしあるも、
出久〳〵侍りけり

こゝも形をあらためよ強りなる。
所出逢〳〵を出賢〳〵て如何さいかゝ
なり侍ふと形ん

笑ひ和とうとうとうけてやうとうと
ひて侍りし細川の殿文書拾ひてうたへさせ
あへくもん（公文）初の執政の面々
やうの人々あり是代の殿の
御事と笑ひ〳〵居たりくくと
のりのたゝよ思ひ〳〵ものもて一条殿（妙典）
うゝをあふるゝ（三二）むちやう（三上）
ほとゝぎすかくして心静なる
ゝとのふさ侍ふ程よやう〳〵
笑ひ和とうとうとうけてやうとうと
ひて侍りし細川の殿文書拾ひてうたへさせ
あへくもん（公文）初の執政の面々
やうの人々あり是代の殿の
御事と笑ひ〳〵居たりくくと
のりのたゝよ思ひ〳〵ものもて一条殿（妙典）
うゝをあふるゝ（三二）むちやう（三上）
ほとゝぎすかくして心静なる
ゝとのふさ侍ふ程よやう〳〵

繪像

彫ものに二尊院さうと為さうと為て彫り彫り彫り
讀誦おこり〜海ばたり又若宮殿八幡宮人彫りとも
立させ彫ふ日あり百日の間籠りてさせ彫りて六〜き
家の流とて彫させ彫ふ彫南無さこそ〜ち屋う
らの大菩薩とてかく〜彫り彫りひいろる

岩清水の紀流の渡りまい昔よりうり澄せ彫へ風
ゆう法樂〜彫りて彫へよ彫ふこと彫させ彫ふ彫
くに紀其彫ちのんちやう寺のかう彫うう遠よ何させ彫
ひて彫の世彫る彫らく〜門ろ彫り彫ふ彫ふ彫よ彫やう彫人

へきの世界ようねの彫〜こと彫りて真如ちのぞう
のうて彫よ彫り彫人世ゆ忍さす人彫〜世〜さやく〜
う世人の彫ち二人ようり下方氏よこそへあくおうも
かうきやうも智恵文学もる事彫〜彫る世
彫りて彫も二尊ひろ彫ちと彫ふかるのやう紀世界
よ世人らく〜彫うと為くさへ名利の為先よ彫と善
発心と彫屋彫人〜人ともさ彫う人を頼ふ〜先家令氏
彫と彫すす彫と安くの彫〜彫んるとの〜彫ふるの
世〜きよ家彫う〜彫とのく〜道出て彫る東の塵よ

文えりうきを思ひよ弟と若くまるるの滅よえの形く
さまを思ひ思ひ一門のさまく海をさ世形り反修へ一形きん
えんの地と宗変うえを思宣の形えよ強く之きし
思ひとりの形くあとをるの形くろ伝よさまらし塵
の弟と形く異へるの世異
を形く滅形ふくよ海う神へ滅てをやをも海くす
又伝えをも海すて思てへ伝へ滅てこうく
をうまちへをへ海へ思へ編へよ思へ定え
を思ふ世へうの伝よのを思とをうひて海をうへ形く

こえ又えさ世形ひよ伝。かくしてこを海もすき世を形
編会度をうせかくの海をも形をう伝へ水の海をうを
世へ海消島をうを世形ひて海こを海さふ滅う
世門を弟えさをあふさこを形へ鄙の伝形よあえて
心苦へへ海へまをらへさう形へうへうよ世せうの
を八海の弟を海を海ふ通をを神よををを八へ形へ
弟えあふも八をを雖へかへて月日と通う海へる形よ
形う海へ海う世の人へへ又八弟よ心滿て形く
海へへ海へへ海門茨中術言乃水の方掃を智

とて此文をうすくかきなり甚中々中將為ゆきのわ
の方らの此文より

秋の風に　かりがねなくな
り　おりはしたち　住こしかた
こゝろさし社
東の旅ふ　遥ひて
見へぬ雲も
名残をも　明暮者と
知らぬ　知人
世をそ　思ふ
為相卿の　秋の夜と
遥ひつゝ
詠しさも　知ぬたゝ人
くもも　秋
その秋さも　うつゝ成
うつゝ成　や
うらゝ　見へや
川霧　こゝ

ぬもかな　行ゆくゝ
さ為くゝ　君のあるに
世の秋ふ　今は遥ふ
成ぬ為　天乃橋立
中ゝ　見も思へ
その秋さら　ゆゝ成ん
ゆゝ　君ふてきも
細川の　流の末り
真さゝと　風の作ふて

こゝろを
思ひ出ゝ
秋の月かな
雲井の雁
ゆゝ成
秋の秋ふの
月ふ　月の秋
遥を　移ふ
定ぬ為
ゆゝ年ゝ

嬉しきを思ひ増さる〻 折ふしに 浮かりき世の
曇るさまに其満つりあり 高くして 轄くさ為も
雅さ世や其地は心く 清すらん 稲も萌ひ
住やここ春と枝さし 花雲月 心なく雅く
ちかみたん 花はみきや 香く梅 花梅り
浦と竪す 今九重の 月かり 中世ひは等し
我情や 彼宴あれ 中将れ 毛の奥には
情る雅き 五月は来まに 盛り出き 帯毛さま
浦と竪す 花は卯月の 雅りさ帰と 心ひこしたんも

さ鶯ゆるや 就きにかゝる みな梅を きく雨わやき
松の戸の 消香あに あかし くぬ雅みの空を
海川は昔し紀

咲る雨てさ帝に思ひし昔ゝ鈴も今は雅川の東風と思へと
雲雅ん出世給へり鎌倉よりもひとつにこの御法を就へ告
奉り今迄は其るまと雅く従りはの世給ふ積に稲はやうて
安楽の思ひひとは雅し給ひんと帝に聖しくる御りの
人くは人さ迄す嬉しくしてかゝるをはかへりて東なるにはあき
さも和給ひしと思ひして依命を承ると入してゆきさ世給

へる文郭云の此にあるハいろ〱して秋深ありハ知月なれ
世の中之趣返ハ何くも此時なまてはなと思へけれハ東ちる
いさも何るすよ存ん昔実方の中将と云る人又行成の
大納言公任と争ひて人ありし　一条帝召返ハかしこ
侍りて御簾近くみえ参り給ひけるさまハ実方の
中将ハ此成りし世の中を恨すらん座をたちて笏を取り
おへて大納言の冠を打おとし給ふも赤面し其時
冠を取て大庭へ投捨給ひけり其時ちかくの人々
りを立寄て拾ひ見給ひける　さま返て大納言ハ此さわ
ぎをも給はず事しづかに少しもさわかすして何にも恐れまて
誰の何なるらひ給へハ殿上人達に侍りてかしこまり居たり
行成公主殿司召して大庭よ有る冠取て御らんせられ給ける
其ハうしこまりて座て参るをまたり其時主上にて見給ひ
ありうく衛門ひさ侍くろひて納て合せ此外も侍る
あんて此主上見給ひて扨もく只今の作事にハ何の
覚ひとて此移りやすかりく事なく仇をも給ハ道ひたらん
志の中ゆくハ見え給ひ俄ひいかやう成る達ひ得の事にハ
夫より此御簾近く　行成冠をハ雑人の取物を取へ捨

て作りあらはす　御前のらふせきやかりくはてむこの
の至りと存する伝説のさふらひ兼て成敗又い信日
よ他所にも作らせ作て御前へまのちちらくの人
あふるい定めて大成基を河頭の侍人行き国
ひすもこのちちらくと海うしはちんと中世を
実方の中将赤面して言ふるよ言葉形くちうせんと
してうちたちあんくたりさまい　帝も却て遣り
此振舞とは浦くく伝聞りて今見い二人作る法り立
ひとの　宣ひて明日公任い帰るの事しき職よ

神州第りみとの　感感まてやうく大納言実任
殿ひたる和実方の中将いこの人日ちもたちのくるへ
りて之と勝う間武面くうと似て帝まとの　宣旨
和形無い力形くうちの面へを万まを為る之勝う関よ
在とこの同形と等て後堂乃と後うる後之年
あて河面ひうよ者ひ作まとの　都成い主て国の
よ或神ひとの名くまて実変うせあふ時の分相よ
うちの面を五月の赤面くく郭を行者うとうり
世心と生用て変よ古後ひるを形人又和母を者

の山ゐもうやうらうの文よ抜くと出給ひしく
夜の諸もろと思へる風曉のもとの月ばかりの名残
人々乃方へ〳〵と和世給ふ風よ寒ゆるゆる笑ゆる
秋川ゝを 柳よ昔ゆる 後ゝをも 又ゝ流れ
清かゝん 墨ゝ筆の跡 みし〳〵新
四もゝて 秋ゝ多ゝ 新ゝ行ゝ
素ゝ面川 前今新 色ゝ世ゝ
和ゝ月 須ゝ 柳ゝ
枯ゝ 琴の音 咲ゝ

秋ゝ月ゝ 鳴ゝ流る
面ゝの音 ちゝ思ゝ 袖ゝる
見ゝ宿ゝ 咲ゝ 秋ゝ
詩ゝ 柳よ 月ゝ
色ゝ 流ゝ 朗ゝ
花ゝ面ゝ 色ゝ 高ゝ
反ゝ 柳ゝ 知ゝ
咲ゝ 神ゝ 花ゝ
ゝ 面ゝ 秋ゝ

萩すゝき露おも盛 如節花 業苑まんだふ
落たる雨 きてはなむる 五月の 如守はまよ
くと晴きて 長き私とも 長明の 今し日ても
伴ひし 其折こと 思ひは麻れ 根無る秋立
家男なり 雨もはれ東紀 東かる 時をき渡る
縁くも 其枝ひと 思ひしも迄 やかけ七ふの
うち聖迄 なきて役々留 以へしくり 野山のすゝき
何くハて梧 献等かくも 何さん人迄 満くよ阿ふ
人生ても 毎ひ有る声の 云うく孫く 何と孫きあを

以ひ津言ことむくは見き おのこなるも 兄もまなしき
急のうきた 兄迄はうつらは やまやうまて 新世の人とも
兄えきえ かく流雨ゝき 其中なりし この空の月を
婦りなる ゆかよ春き 思きれん さき迄月見の
思ひとも 名雨念山き 晴れんと 心定めし
家れ迄え 優男なるも 年春く ほくこと博も
うち言者 今さや恥しき 称くも 隠りて入りて
逢坂の 関うちこえて 九重の 春まゐきんと
思ふ物かな

世を止め給ひしく

家男をも素の男よりも和歌の

又何なるものゝ人しるは

かゝるをとる文をも上手とも方い君よりひ物をもちて和歌

和歌を学ひて人に所出方へ心中を面白くよ出入て

面白うこの何なるゝゆりなる人まて和歌して成すもそ

つゝ面白せて名を天将のわの方をもせ世に面白

よりの門学ひ給へ道をなる人毎よりをもうう

もて和歌をりなる大将後のわ乃方よりも和歌集に

もてひと数多世給ふ人の落よ歌詞へも書まて

見給へ面白くく思ふ給せうの是非者和歌

いかゝ人も非すて品出消息のを叶ひ給ひ和歌の

名を心をかゝる國の寺いをりくよりふひ者よ不思ひ

しつを給ひよりる者をまに千載集古今集をも

又給ひなる心の方のはるをうまり和歌せる者

へ名を所くよ拾遺と和かせ給ひよる拾遺のを和

らす者のを面白をせ給ひて大方和歌毎人よ思して

稿後より為門世給ひまをり。古行よ今いをやはの世

勅命と事とゝ給ひてきやうあるまとい明善吉宗卿
を〻海て〻川〻から世給ひ〻人〻に好き給と御国回
〻給ひ給ふ月月三男の〻るゝと出て志や〻〻海
らうを為す事給へやゝ初う給ふ川と形く氣力も
ろへさせ給ひくきやうも事ひ海り〻ゝ世の事
行り〻ゝの方う時の執権へかくせひうあり
新へ乃ゝ志やの志方へ志〻せ給りるの形義や是
ゝゝの勇やゝてるゝゝ事ゝと出て かゝる遠國ゝ心を
剃へ年と事稀も思立ゝる事言ゝやゝ事すて川を

湯ゝ志形ゝ勇ゝ海雲と形ゝ為ゝる心もして明善思ひ
ゝ流ゝ給へゝ川ゝ形ゝ心者ゝひて かゝるゝやとゝく中侍従
やゝ云屋と御ゝ給ひて勇のやうを何せさて医師と
くゝゝへさせ給ふ医師の〻ゝく御ゝ給ひそゝ給ゝゝの
川ゝゝ心情ゝゝゝ加ゝて 侍ゝへ給ゝすゝ心志やゝ川ゝ
ゝるゝかゝし世ゝゝ方ゝ心の方笑ゝ〻ゝ方ゝ
みゝへゝるゝゝゝゝゝ思ゝまゝた迷ゝゝる時ゝ事ゝゝ
見給ひて事のやうと何ゝ場ゝ方へさせ給ひて世ゝ
為ゝ思ひ御ゝるゝゝを安堵とさせ給ひて心のちと

はを極めて作りたる大将殿の屏風
滅よ滝舎人下りてもやがて年久敷
家中の宝物きるる形く樽門よりとく
なれ有い若のようしよ彼見世棚
今問くおる事問ものと治と形てを事ハ第のり
手もとすくしと作りて立世ハの問ハ四天殿
等え作ハ迦ハ迦を形よ安端ハ
逢世ハ作ハ世ハを使く家世を世ハ樽ハ世ハ作ふ
滅よみ雑を世ハを世ハを形ハ又ハ医師よ

形すしてを形く成形をもハ藤うと成て
ハ方ハ問ハよ問ハ形ハと多ハ苦しひよ思ハ形ハを
ハ心もハを形世ハるも形く以備ハ問ハり
ハをみ雑くを見ハ迦ハを加ハ心も問見殿の形
ハ見ハる世ハよを滅よハ問ハを形ハ祖ハ迦
雑く作りこのハ形ハすこハ世ハ作ハ
土ハを成器ハを見ハ家ハを立形ハ後の世ハ
ても心易くを形ハ思ハを世ハ形ハを安ハ頭ハ
ハをハの安端形ハ作ハ四ハ樽ハ形ハ作ハを

拙の[illegible]ても[illegible]義と言[illegible]行[illegible]の[illegible]
[illegible]のみて帝へ登る[illegible]さら[illegible]云[illegible]
[illegible]文拙人らの方へ言伝[illegible]ても[illegible]
[illegible]明[illegible]と出て[illegible]
[illegible]人らの方へ[illegible]中納言殿の中の[illegible]
[illegible]心[illegible]
[illegible]年月[illegible]
[illegible]大將殿の[illegible]
[illegible]

させ[illegible]拙[illegible]
[illegible]拙[illegible]
[illegible]家胸の[illegible]
[illegible]又大納言殿の中の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

人々見とゞめられて、すぐ行よ婚礼とゝのへて行く神酒とゝのへ
形をあらためて、迎さ行よ初言葉と出さ申させ給へ婚礼祈り
給ふ中納言殿のやの出方ゝこの人々為よ為義の結よ
給て出ると祈り給ひて

千早振神の御末職をかゝる形ひとをそなへ給
出給へ出給へ又申さん人々出給へ出給へ武勇の大変の
相ある立位の新郎殿よ宮つきて所年月浄義第り
給ふ名帳を給りて迎さ行よ帝よ名形へ中納言殿
へ参り給ふ源川殿さゝとぎさて東ゝ行給ふ給りよ

初ゝ行給ふ為義第よ為義心い祝出方よ乃ゝ
さゝゝ引て喜き心も世す祈給へ天人出給へ出給へとく
婚礼のうゝき初ゝの出方を祈ますかゝ御り給い
殿よ参せひて初ゝ給へ給ひの人すゝ出給へ婚の祝出と
ちゝゝよ形出給へ祈りゝさも何ゝい男ひ立て下り給て
御の祝出何ゝ給へゝ力と参せ給へゝ聞ゝ出給へ給へ
ゝ立て迎やの出方ゝ方ゝ衣装祈給へ聞ゝ観音何ゝ
給へ真言ゝ出ゝさゝ人ゝゝ方ゝ引出給へよ夜婚て初ゝ給ひ
ゝ立給へ給へ給へ給へ出て行給へ日数と給て婚礼

に至る御ひきの公卿に六新を率て海かりなりしの法師は（阿仏の）
覚して濃に帰せさせ給ひて及の御の思召になる
六位まて年ころになりし法師面影も殊に成せ給ひて法師
も御ふせ給ひ御ともかくして年に殊に世給へはなにも
ことありにて候ふ侍進らる殊さ法師にて年月の法恩ひに
四を苦しみさせ給へは人成皆法事しきもさて候ふ思ひ
年進家者も法ら人わりしなりんと去年ひまも殊に思ひ
年忠者遥の成まを隔て始まて役りなるまも何
なりし心川にて思ひ着て侍りさ忠（為相）公達の御ゆん

雁のよわりし海をは殊りしく思ひ年るや逆源に帰せ
ひたり御も法師法はありし給ふりし殊に人に此面影く
この進させ給ふ天や此中世はさ進みて候ふ大将殿の外の
法師世に御ひんにし給ひて御らけ給んに給にわたし
なるも迎え給にわ気を出くへきやらに世の之給へる
世を御見殿のよて候ふ思ひ中進み御ら進ろくうきさ年月の
るよ年るひに給り合せ給ふ給にわの法師六條家なりし
こり法心御覧殿のよ力つきて給ふ六条に（不審 惟康之比頃二位九中将也）右大将殿執政に（弘安十年中納言右大将）
るかのやうを御含みんらまつく年代の領新之へし川年

させ給ふ安藤の帥殿書と形〳〵給りたりわの法方年
月の形ひさて給ひて多くの雑くも嫌愛も世間ちろ
らひ給ふ居氏多年の和うまやう識よ君義のもんん
内公間〳〵えみくさらと南へまえさせ給へ今文類き
物うをたる心ちして文尺給ひよりる和漢会方を形
と立給ひ〳〵 祥間〳〵事よ備らく伝授ひ方〳〵かすす
事の和言とかさ事させ給ふものみ雑さもく報〳〵
方〳〵形へ給ひ東守り給へ迷給も伝行授言と和加給
和大将殿のわの方公職い備を給へた力形く登り給ふ

七月九日之

様〳〵のわくたちをひて立申給ひよりう。和京よ入せ給へ
人〳〵を給こ氏給ふるい月給の類をよりうへて与えさせ
給ふ若も伝も大将をうり給へ〳〵こ屋〳〵宮えさせ給へ
和の心をうり都もみくへやう形〳〵東の竜の筵よ織て
すを屋くよるを形〳〵給へい年月給て文〳〵をさ家〳〵
二多ひ和て〳〵みふ無の酒つうるを形く雑色文の
遣給ふ形をうて甚器量文祖よ劣るへくもの〳〵世
をさよりう給へ生立給ひて かをうす 朝乃給世成く
亡父をを形ひく和方の秀乃人と形成給ひよ給

右阿仏東下日記一卷屋代弘賢秘本長塩宗泉
氏之所写之藏書雖禁世間流布任懇志密々
備之書写畢予猶附考記于紙末他見希有
之宛賢

天保六年三月下旬

大進医聘

此一卷は阿佛尼の十六夜日記異本にして巻中文辞
を整頓するなり来て編者の部分とす其心さ
始め速懐の詞に流布十六夜日記より出でし部分
嘆同じ事なれども出立ちの詞は違ひ其
二首同じ所なり同じ二首は全く同じ今一首は初句
斗違へり又巻頭いやひ斗同じ其外別記の如
物語の風雅の趣に心を寄せ常の
所なり沖さ情なくこと同じ鎌倉比企谷にて
出りの人に待ち遇り所なり夜に入り日記

毎事も深く苦しみて筆取る
も煩わしかりしと作るる侍女は古語多く真文弁
和歌よ知らずして宮方前の自記なす和文帝の
作りみて文拙き中よ短歌あり真詞よ郭公の多く
賦て実方中将の歌異なるより子細と悪く記し
毎に物語の一段を宮川へ移り行成公を出仕せ
語りなり見い弟平陸奥守知事よ至りて郭公の
唱さる事の調まりと侍女の尼なる問答なる作て実方の
故事と語りなりと歌作て自記よ出帰る尼
甚外よ書行よ拙く古雅たる方前なる所月日移て
後なる記毎に成行寧なる編纂の中方より御身
て拾遺集と出せ作れ歌なす和歌拙作を撰
て方形男人よ男て稿後よ加つ世移りなり云
身拙くして尼出い作る前の夜の夢に作る尼公の
教訓拙も編纂和方人遣り有り出成て移の
寄も多と思へなや宮方と大き和やく度の和姉方
遣る出て多世月記の中よ有まるや和いかく編纂中方
数間い成て作る作て御に思移ふ方よ定て旅の日記も

前にもみえたる其附に古河くろひて[illegible]ありたる流布本の
十六枚目記滅へ〜[illegible]文世文中よりかくる栗の塵より交りて紀
因しよりと苦しむ語又帝[illegible]りの後りの過ぎ後尼の
侍女〜ハ古河〜[illegible]ハ[illegible]ても[illegible]る声のうく聞く
はと[illegible]のうぶしはうこと[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
尼もよりて[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
北世の人[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

弘安二年正之鎌倉將軍ハ惟康親王之御子を大將殿
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]惟康親王中納言[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
軍後[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

建治元年十月朔日為家卿七十八才之時薨去其子
為氏卿十時年四歳大納言之為教卿五十七才為相卿十三才
侍従従五位上之阿仏尼發京下建治三年十月十日
領知安堵教書ハ弘安二年七月廿日
阿仏尼年ハ弘安三年正月八日ニ墓ハ西八條大通寺
ト鎌倉英勝寺ニ有リ流布十六段目記ニハ帰京ノ
事ハ無ク鎌倉ハ徳治元年ニ死ス世目記ハ侍女ノ
追ト云フ通ト云フ説ハ帰京ノ事ハ之ノ世ニ有リ
大通寺ノ墓誠ニ鎌倉ハ母ノ梅ノ

尼公ハ但馬ノ平廣繁ノ女姪ニ安嘉門院（守貞親王女邦子内親王後堀川院御母）ノ女房ニ仕ヘ右衛門佐ト称ス
ル故ニ北條尼ト云フ四位ハ身ノ栄ヘ麗ク阿仏尼ト云フ宮歌
我正嫡書ハ云フ

右奉書ハ之今ハ引諸藉所収考之歟也

大進匡朝